

# 豊上 の孤独。



## 花を摘む

と、いうわけだとオレは言う。

そうして、じゅうぶんな間をおいてから周囲を見回し、宣言する。

『僕たちはこれから、多くの“くさびら”を捕まえなければなりません』

——“くさびら”？ ってなんだ？

“くさびら”が癡猛に振る舞うことがあるかもしれないので、この捕獲網を使って下さい』

と、竹竿に網をつけたよくある、あの虫捕り網を突き立て、続け、足下の箱に入っているそれを出しては教卓の上に積む。

『では、解散』

——解散？

クラスメートたちが教卓にある虫捕り網をそれぞれに手にしながらボンゴレアジトの会議室を出て行く、オレも出て行かなくてはならない、獄寺や山本は倉庫番の当番なので、待機。交差点の前に出れば、一緒に“くさびら”探しをするパートナーが待っている。

これは夢だ、とオレは知っている。知っているけど、上司は失踪中だから、オレを始め、みんなで動かなきゃならなくて、それでも鍵が見付からなくてオレはなんだよ、どうしてだよと焦っている。

——まてまてまて。

『ごめん』

と、点滅している青信号の下で腕を組み、待っているのは骸だ。骸はむっつりと言った。

「まったく何なんですか、あの男は」

「だから指輪の意思……」

なんだか叱られている気分だった。

骸は青い空を背にして、湖のほとりに立っている。樹の生え方とが見たことがある風景だなあ、とのんきに考えたが、湖がなければハイキングというリボンに扱かれたというかひどい目に遭わされた森だ。ちよつとどこかかなりいやだなあ、と思いつながら骸を見る、なんだかんだ言いながらこいつ、クロームが危なくなると出てくるんだよなあ、でもどうやって出るとかさうでないラインが分かるんだろう、案外タイミングとかはかかってそうだな。

「そもそも二代に渡る守護者だったら二世の背後霊宜しくそっちにへばり憑いていれればいいんですよ」

「一応お前の先輩だぞ……?」

そりゃあ、自分だってびっくりしたけど骸は本当に容赦ない、ヒバリさんやリボンもそうだけど。

「あんな短慮で嗜虐趣味だかの妄執に取り憑かれてるナルシストはこっちから願ひ下げです」  
ツン、と横を向かれてしまつては、宥めればいいのか、もつどうすれば。

「でも、クリアしなきゃダメだったし、会わなきゃ不完全なまま戻ることになつてたよ」  
「…ふん」

と、自分と骸の間を一体の“くさびら”がててと駆け抜けてゆく。

『待て！』

“くさびら”は小さくてとてもすばしっこい、オレの腰くらいまでの高さしかなくて、昔風の、時代劇などでよく見る殿中の侍の格好をしている。ばつさばつさと長い裾をさばきながらも思はず尊敬しちゃうような早い身のこなしで捕まえようとするものの手の間からすり抜けてゆくのだ。

『君がもたもたしてるからですよ』

今回組んだパートナーはやさしい物言いをするひとだけど、言うこと全てが正しくて、そのぶん冷たいような印象がある。

『二班と三班で“くさびら”四体を確保』

“くさびら”は自由になつたことで嬉しがり、まるで追い掛けられることも楽しむかのように動き回っていた。悪さをするわけではないが、増殖が途轍もなく早いものだから密閉された場所に置いておかないとやがて埋め尽くされたいへんなことになつてしまうのだった。オレは“くさびら”のプールとか絶対いやだし、毎日の食事が“くさびら”尽くしだったら泣くだろう、たとえそこにハンバーグがあつたとしても。

『三班は隊をふた班に組み直して下さい、サポートへ』

パートナーは連絡を受けるとそう指示する。見渡せば湿原の中には縦横に伸びた通路があつて、まるで地下のパイプラインのように曲がつたり交わつたり、行き止まりになつたりと迷路のようになっていた。

『綱吉くん！』

名前を呼ばれてどきりとする、でもどうしても“くさびら”以上に行かなきゃいけない場所がある。

『あとで！』

オレは虫捕り網を投げ出して湿地に足を踏み出す。ぬかるみに足を取られそうになりながら必死に前へ進む、後ろから一体の“くさびら”がけたけたと笑うようにして追い掛けてきた。

『ダメだよ、危ない！』

——どうしてそんなこと言つんだ？

立ち止まる。

『どうしてここに来たんです？』

水の匂いがある、冷たい風が吹いて、湖に波が立つ。

骸は少し怒っているような顔で立つていた。数歩先で、正面に向き合わず、骸自身が立つて格好いいと思つているのだろう、

自分から三十度くらいの斜めの角度で。

「お前が呼んだからだろ」

暫く黙って見返してから、背を向ける。もう少し分け入ったところを探す。

「呼んでませんよ」

追うように骸の音がする。

「そっだったかな」

と、歩きながら返す。

「ボンゴレ、あまり奥に進んでは戻れなくなりますよ」

骸は冷たく言いながらもちゃんとして来ている。

「夢だと分かっているのじゃない？」

「うん」

「しかし、僕の世界でもありません。このまま此処にいるつもりですか」

「だけど、ここには百年の花があるから」

湿った土を掻いて芽を生やし、草を伸ばした花がある。ようよう頭を持ち上げ、蕾は太陽を少し眩しそうに見上げている。

ここまで育つのに途轍もない時間がかかるし、なのに咲く保証もなく、他の植物にもあるように蕾のまま枯れてしまうことだつてある。

よかった、自分にも見付けられた。

「骸にも渡さなきゃなって、思ったんだ」

「……」

土ごと掬って差し出すと、骸は苦いような笑いたいような何とも言えない顔で花を受け取る。

「……」

「…んが」

目が覚めた。

「……」

なんだろう、右手が持ち上がっている。不気味に思っただけで痺れてもいないし、何ともなかった。

「おはようございます、十代目！」

「あ。おはよう」

洗面所のガラスに写り込んだ姿を見て気付く、寝癖だ。いや、わかりにくいんだけどそれなりに強く踏み躪られたあとがついた芝生というか、流れとは真逆の方向に向かう毛の一群が見えるのだ。

「……」

「十代目？」

獄寺が不思議そうな顔で覗き込む、あわあわと手を振る。

「いや、なんか、夢を見てっ」それで…。

寝付けなくて寝返りを繰り返したからだ。恥ずかしくて、隠すようにして懸命に引っ張る。何を言い繕っているのだろうかと思いつながら廊下を歩く、彼はもちろん、京子ちゃんに気付かれたくない。

「夢ですか」

「こんなときに不謹慎だよ、はっきりとは覚えてないんだけど」

「見たことも忘れるってのありますよ、夢って」

誤魔化すようにして言ったのだけど思い反して食いつかれた。

「う、うん」

頭から手を離す。はねた毛がなんとなく草に見えて、そこから花が咲くなどホラーではないのだけど。夢でオレは誰かに、花を渡さなきゃいけないかった。

「夢って変なのが多いよね…」

獄寺くんはですよ、と言つて最近彼が見たというスベクタクル溢れる宇宙大戦争の夢を話してくれた。彼の夢もスケールでかいなあと思う。前に山本が居眠りしたときはホームランを打つてホームを走ろうと思つたら教室だったと笑っていたことがある。

「渡せたのたのかな」

大事な、大事な花なのだ。

ばあつと花開いたかと思つたら砕けて、三々五々に散り、それからいくつもの夜と朝が訪れて、やっと散った一つが芽を吹き、花を咲かせた。

「そっだといっすね」

獄寺は不思議そうに首を傾げてから、合わせてくれるのか横でにと笑顔を作ってくれる。うまく目が笑えてないから緊張しているのがわかる、山本とお兄さんとも食堂へ歩いているうちに一緒になって、いっそう身が引き締まる思いがした。

朝食を終えたとき、ふとスクアー口の声を聞いた気がした。敵が来たのはそれからすぐ――。